東京教区時報　「コミュニオン」特別号

東京教区の宣教を考える会　特集

WEB:http://nskk.org/tokyo/index.html　E-MAIL:comm.tko@nskk.org
Phone:03-3433-0987　Fax:03-3433-8678　Diocese Office

第１号（通巻 1236 号）
２０１２年３月４日
日本聖公会東京教区
港区芝公園３－６－１８
編　集　広報委員会
委員長　渡 辺 康 弘

「東京教区の宣教を考える会」が、２０１２年２月10日（金）、11日（土）の両日、静岡県函南町の「富士箱根ランド　スコーレプラザ」で開催された。

この会は、２０１２年日本聖公会宣教協議会東京教区準備委員会（委員長　神崎和子司祭）が主催し、教役者と各教会からの参加者が、全聖公会中央協議会（ＡＣＣ）で議決された５つの指標を中心として、宣教についてさまざまな観点から学ぶことを目的に開催された。

当日は、谷昌二沖縄教区主教をお招きし、大畑喜道主教をはじめとした教役者23名、各教会から信徒53名、教役者を除くスタッフ６名の計82名が出席した。

開会礼拝の後、「セッション１」として、大畑主教から、「神と神の国のために生きる共同体となるために」と題して（２面、３面参照）と、谷沖縄教区主教から「他教区からみた東京教区への期待」と題して、講演があった。今回お招きした谷主教の講演では、歴史を直線的な視点から、イエスさまを中心としたＵの字の曲線で表すことで歴史認識のパラダイムシフトがおこるとの持論が披露された。自身の半生を振り返り、沖縄に遣わされたおかげで、本土が抱える課題がよく見えるようになったと語った。福島第一原子力発電所事故と沖縄の基地問題にも触れられ、３月11日以降、課題解決のために私たちは、「福島」と「東京」、「沖縄」と「東京」、という対立構造としてとらえず、「原発も基地も国民全体の問題」という認識を持たなければならないと説いた。

また師父は「罪」と「負い目」について、「主の祈り」は、「わたしたちの負い目を赦してください」と訳されている（マタイ６・12）。私たちが日常祈っている主の祈りでは「負い目」を「罪」と唱えており、多くの人が「罪」と「負い目」は同じ意味ととらえている。しかし、「負い目」とは、既に負っている者が、自身の負債について抱く感情であり、悪いことをした事実である「罪」とは必ずしも同一ではない。私たちが、神様に「負い目」に対して赦しを請うとき、東日本大震災によって顕在化した放射性物質汚染の問題や沖縄の基地問題などについて、自分のこととして祈ることができるのではなかろうか、と説いた。

セッション２と３では、参加者を10のグループに分け、宣教について活発な討論が交わされた、所属教会で行っている宣教の事例、宣教を行ううえで課題に考えていること、宣教するために必要な信徒の変化、宣教をするうえで大切もの、賜物を活かした宣教の事例、宣教と祈りの関係など多様な視点から、宣教について各セッション合わせて４時間30分の討論を行った。特に、２日目のセッション３では、セッション２で挙げられた多様な意見をスタッフが集約した資料に基づいて、「だれと」共に「どこへ」行くのか、を具体的に可視化する作業を行った。各グループでは、ときには白熱した議論が交わされる場面やお互いの立場に共感し合える場面があり、充実した検討の場となった。

セッション４では、セッション２と３で討論した成果が、ファシリテーターによって発表された。どのグループも「だれと」共に、「どこへ」行くのかをまとめるのに苦労したようで、参加者に理解してもらうために、補足説明に時間を費やした。（４面参照）

全日程を終えて、大畑主教から、「みなさんの発表を聞いて、喜びに満ちている。この想いが冷めないうちに、この成果を各教会へ持ちかり、教会員と分かち合いをしていただきたい」とのお言葉があった。

閉会聖餐式が大畑主教によって執行され、全日程を終了した。

―東京教区の宣教を考える会講話（抜粋）―

「イエスと共に、イエスに出会わされた人々と共に歩んでいく共同体となっていこう」

主教　アンデレ　大畑喜道

◇私たちの宣教のビジョン

教区の教会からの代表、教役者の皆様が一同に会して泊りがけで話し合い、現状の認識や将来の展望について、教会の宣教について意見を交わすことができる機会が与えられたことを感謝します。主教の宣教のビジョンは何処にあるのか、何を目指しているのか、明確にするようにという声を聞きます。竹田主教は東京教区の宣教方針として「いと小さき者とともに」という方針を提示されました。基本的に小職もそのことから外れていくことは無いと考えています。

宣教のビジョンは多くの人々の声、知恵がなければ、主教一人の考えだけでできていくものではありません。互いに祈りあい、支えあいながら神の宣教に参与できたらと思います。

基本的に宣教を考える上での基本的な柱は、全聖公会中央協議会（ＡＣＣ）の会議で議決された5つの指標にあると考えています

①神の国の福音を宣言すること。

②新たな信徒を、教え、洗礼を授け、養うこと。

③愛の奉仕によって人間の必要に応えること。

④社会の不正義な構造の変革に参与すること。

⑤被造物の完全さを守り、地上の命を保持し、新たにするために努力すること。

私たちは恐れてはなりません。私たちはすべての人が同じように行動することができるわけではありません。自分のおかれた立場や才能によってさまざまな事を行うことができます。私と同じことをしないからと言って相手を非難したりしてはいけません。隣人を信頼し続けることが重要です。

各教会の独自性を私たちは認めなければなりません。東京教区の教会が一つの共同体として、全体として5指標を成し遂げていければよいと思います。ある教会では、このことをやる。またある教会はそれを後方支援する。また実際に行動している教会は各個教会が、祈りの力で後方支援していることを信じていくことが大切です。一人の一つの手だけでは拍手はできません。二つの手があって始めて手を叩くことができます。自分だけで叩くことを神は求めていません。

◇祈り支えあう関係を

今回の地震では多くのことを学ばされています。北海道教区は釜石地域の人々と連帯するために少ない人材で頑張っています。神を信頼していても、力が与えられているからといっていつまでも奇跡的な働きをすることはできません。私たちのできることの最大限は何かということをもう一度考えて、実行していきたいと思います。そのためには大きな犠牲がなければできません。隣の教会どうしが協力し合って、合同礼拝を行ったり、午後から聖餐式を行うことで具体的に協力することが可能でしょう。

東北教区との連帯だけでなく、世界大の教会としての責任もあるかもしれません。カンタベリーで新しい主教たちに言われました。「日本は言葉の壁もある。しかしそれに甘んじて国を閉じてしまっている。」いろいろなニュースも伝わってきていますが、それを自分の問題として捉えていくことのできない閉鎖性を指摘されました。アフリカから来た主教たちは、日本の震災のことを覚えて、宣教する教会に成長するようにと祈ってくれました。あなたのことをいつも覚えています。祈り支えあうことができる関係をつくりあげていくことが急務になっていることを感じました。互いに祝福し合えるような教会を目指していきたいと思います。祈りは、私たちを一つにし、世界を変えることができるほどの力が与えられます。

自分を守ることから自分をいかに変えていくか。犠牲にしていくことができるのかが問われている。しかしこれを成し遂げることは人間的に見

たら本当に大変なことです。今私たちは。挑戦を受けているのです。

被献日の福音書ですが、神殿奉献の物語を思い起こしてください。シメオンは年老いて何もできなくなりました。アンナも神殿にいて祈ることしかできません。彼らは救いを待ち望みながらもどんな思いでいたのでしょうか。神はまずこれらの存在に目を留めて、救いの到来を賛美することをゆるされます。たった生後40日目の幼子です。何もできない小さな存在であると、もはや自分の時代は終わってしまったと考えてはいけません。神は真っ先に羊飼いたちにその誕生を知らせたように、この世界で中心にいる人ではなく、周辺に追いやられた人々に救いを明確に示されます。勇敢な戦士が私たちを救ってくれるのではない、この小さな幼子が私たちを救ってくれる。シメオンやアンナはそれに気づくと、人々に知らせます。これを人々が受け入れたかどうかは伝えられていません。老人のたわごとと人々は無視したかも知れません。しかしそんなことは問題ではありませんでした。彼らは賛美をし続けるのです。

社会の構造を変えていく。と言われてもなかなか実現させることは難しいことです。どこから手をつけていったらよいか、時には暗澹たる思いになってしまいます。私たちの力が、どんなに小さくとも、小さな石を水の中に投げ入れたら波紋が広がっていくように、思いもかけないような出来事が起こっていくはずです。諦めが一番いけません。

◇宣教の主体となって

教会は宣教することによって自らの存在意義を確認する集団でもあります。教会が現在抱えている様々な課題や困難を解決していくために、東京教区につらなるすべての兄弟姉妹が主によって一つになり、誰かに任せるのではなく、自分が福音宣教の主体となっていく決意を新たにしていくことができたらと思います。

教会の数に比して教役者の数が不足しています。一人の聖職が複数の教会を持つこと、共同的な牧会体制を造っていかなければならない物理的な状況もあります。しかし数が足りなくなったと後ろ向きではなくて、全ての神の民が共同して宣教に当たるための準備ができたと考えた方が良いようにも思います。様々なタレントを生かし合うチャンスが与えられたと考えたいと思います。私たちの共同体は、他人の弱さを責め合うようではなく、与えられた賜物、タレントを生かし合う共同体になっていきたいと思います。

それぞれが得意分野で互いに分かち合い、担いあっていくときに、東京教区全体が福音宣教の器として成長していくことができると確信しています。イエスが誰と出会ったのかを見つけていくためには不断の聖書の学びと礼拝生活が不可欠です。

谷主教は先のプレ宣教協議会の時に説教されました。「この世の中で苦しんでいる人がいる。私たちも苦しんでいる。と同時にこの私もまた、加害者として、苦しめている側に立っているものである。この自覚をもって、初めて真剣にこの世と関わって行く道が開けていくのではないでしょうか。そしてその私をイエスは新しい命で生かしてくださるのです。」自分が加害者であるという自覚をもって聖書を読んでいくと言うことは非常に難しいことです。しかし本当に素晴らしい共同体になっていくためにはこのことは大変に重要なことであろうと思い返しています。

◇主教座聖堂の責任

最後に主教座聖堂の重要さについてお話して終わりたいと思います。主教座はいつも使徒継承を思い起こす場所だと言うことです。主教座から司祭は各地に派遣され、各個教会はその地域での出会いをしてその地での責任を果たします。地域の教会、教区の教会は派遣された司祭たちによって、神のみ言葉と聖餐によって一つにしていきます。主教座聖堂は使徒の継承のシンボルである主教座が中心にあります。主教座聖堂ではいつも祈っています。恐れを持つことから解放されるように、与えられた責任をどのように果たしていったらよいかをいつも祈っています。主教は、司祭団と共に、私たち一人一人が使徒の継承者として、イエスと共に、イエスが出会おうとした人々と共に神の愛を現実のものとしていく使命を帯びていることを自覚するために存在しているのでしょう。恐れから解放されて宣教の業を行えるようにと祈り続けています。そうした点から考えると主教座聖堂の活動は非常に大切です。宣教や学びについての責任は主教座聖堂の活動にあると考えています。主教座聖堂の活動と教区の活動について共有されていけることを願っています。

（抜粋・文責広報委員会）

ー　だれとともに、どこへいく　ー　「東京教区の宣教を考える会」の成果として

・２日目のセッション３では、グループごとに今回のテーマである「だれとともに、どこへいく」の、「だれ」と「どこ」に当てはまる言葉を考えていただいた。

参加者は、はっきりと言葉化することにより、今まで討議してきた「宣教」の具体的な内容（私たちが、今できることから、最終的な目標まで）をあらためて確認できたのではないだろうか。

最後のセッションでは、これらの言葉をファシリテーターの方が説明し、各グループの思いを分かち合うことができた。

下記に示された言葉は、参加されなかった人には、分かりにくいと感じる言葉もあるかもしれないが、どうぞ、これらの言葉に込められた宣教への熱い思いを汲み取っていただき、一人一人が、また教会が宣教するにあたって、具体的に生かしていただきたいと思う。

	だれと（ともに）	どこへ（いく）
A	イエス様の招かれた人と	一人一人の命を大切にする
B	私たちが出会った誰とでも	ひとつにつながるところまで
C	教会の中や周辺で、困難の中にある個々の人と、自分が遣わされ出会った人と、　み国の実現を望んでいる人と	主の祈りのめざすところへ この世のみ国の実現へ向かって
D	身近にいる「小さくされた人」（東日本大震災の被災者、浅草ヨハネ給食活動で出会う路上生活者、教会に来る悩みを持っている人など）	神の国の喜び 神に生かされていると喜べることへの実現に向けて
E	子どもたちと 課題と 痛みある人と 声なき声を聞こうとする人と 隣人と 求めている人と イエスの示した人と 教会人と みんなで	礼拝に 解決に 希望ある所へ 現場に聞きに 礼拝に 新しい所へ 共にいる 地域へ 聖餐を分かち合う
F	東北被災地へ支援するため 子供や地域住民の願いを大切にするために 様々な理由により教会から離れてしまっている方々へ	教役者の派遣とそれを後押しする信徒との働きを工夫して、チーム・ミニストリーを実行する。 諸聖徒幼稚園の存続に関して、東京教区としても関心を持ちサポートしていく。 自分たちができることを考え、実行する。
G	信徒及び教会の外の人々も含め（子供、高齢者、障害者、被差別されている人も含め、福音を必要としている人と）	どう連帯していくか 一人一人が大切にされる社会へ共に歩いて
H	横にいる人と	幸せなところへ（神の国）
I	地域・コミュニティー 震災被災者（東京在住）	地域の課題を担っていく 訪問したり、話を聞く（教区をあげて）
J	顔が見え、信頼と敬意をよせあえる人々とあなたもわたしもが	総論賛成、各論反対ではなく、東日本大震災の被災地の困難の中にある人々のもとに

（文責・広報委員会）